

すいしんしまさひで しよかん  
水心子正秀の書簡

市指定有形文化財（古文書）

中川地区の元中山地区に「水心子正秀誕生の地」と記された標柱が立てられています。水心子正秀は、我が国を代表する刀匠（刀鍛冶）の一人で、南陽市が生んだ歴史に名を記す人物です。

水心子正秀は、幼名を三治郎と呼び、早くに父をなくしたことから、母と共に7歳から12歳頃まで、生誕地すぐそばの鈴木権次郎家で過ごしました。家が貧しかったことから、灰を敷いて、そこに文字を書いて練習したと言われています。

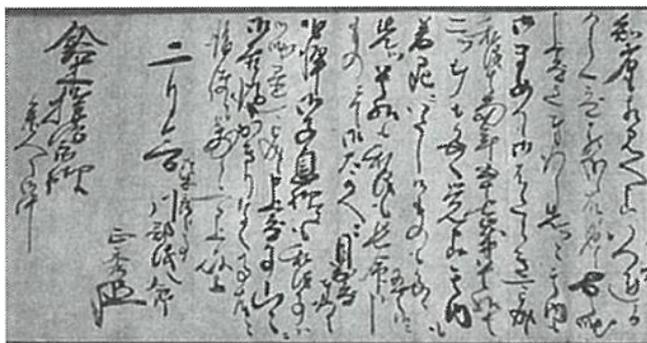
その後、北町（赤湯地区）に移り住み、刀鍛冶となり、縁あって山形藩の秋元家お抱えの刀工として新々刀（※）<sup>しんしんとう</sup>を世に送り出し、刀剣史上に新々刀期を打ち立てました。また、教育者としての一面もあり、日本刀に関する書を執筆し、多くの門下生を輩出しました。

「水心子正秀の書簡」とは、文化3（1806）年、水心子正秀が57歳の時に幼少期にお世話になった鈴木権次郎にあてた手紙のことで、現在は元中山地区の個人宅に保存されています。この手紙は、元中山地区にある永雲寺の住職であった武田玉雄氏<sup>こあぎ</sup>が解説していますが、武田氏の解説によると、手紙には「花窪」<sup>はなくぼ</sup>や「日影」<sup>ひかげ</sup>等の元中山地区の<sup>こあぎ</sup>小字名や幼馴染の名前が記されており、故郷を想い幼少期を追憶する様子が感じとれます。

手紙には、「私の鍛えた刀を一振り欲しいとの事、私も生まれ育った所ですから、一刀差上げたく存じます。折を見て、一刀鍛えて差し上げましょう。」と書かれています。果たしてこの刀はどうなったのでしょうか。また「江戸浜町の秋元但馬守<sup>あきもとたじまのかみ</sup>の中屋敷ですから、刀鍛冶川部儀八郎または、水心子正秀とお尋ねなさって下さい。」と、江戸に来た折にはぜひ立寄ってほしい旨が書き添えられています。

灰で修練し身につけた文字で書かれた手紙は、水心子正秀の作った刀とともに大切に保存していかなければならない貴重な文化財です。

※＝南北朝～室町時代初期ごろの古刀を理想像として1800年頃から1876年の廃刀令までに作られた日本刀。復古刀。



結城豊太郎記念館 館長 加藤正人  
平成30年6月1日号 市報なんよう掲載